

小説家「うさぎ」の誕生と手書き小説のはじまり¹ — ポル・ポト政権崩壊後に文学を甦らせ育んだもの —

岡田知子

トリックスターとしてのうさぎ

カンボジア人なら誰でも親しんでいる昔話に「おおかみ」という話がある。飢えたおおかみが沼の小魚たちを騙して食べようとするが上手くいかず、森の動物たちを味方につけ、小魚たちを食べ尽そうとする。小魚たちの窮状を知ったうさぎは、見晴らしのよい蟻塚に上って、虫食いの葉っぱをあたかも重要な書簡であるかのように振りかざし、動物たちに宣言する。これは神からのお告げだ、動物たちは皆殺しに遭うだろう、と。小魚たちの潜んでいる湖の水をかいたしていた動物たちは我先に逃げようと大混乱に陥り、溺れ死んでしまう。

うさぎはいつの時代でもカンボジアの人びとにとって、知恵者、救済者、ヒーローでありアイドルであった。昔話では、好物のバナナを報酬として、妻を取られそうになった可哀そうな男を助け、嫌われ者のワニや欲張りな人間を懲らしめる。今でも小学校の教科書にはキャラクター化されたうさぎが学習者の案内役として登場するし、2023年にカンボジアがホスト国となった東南アジア競技大会でのマスコットキャラクターも、伝統的な格闘技の衣装を身に付けたうさぎだった。

かの悪名高きポル・ポト政権が崩壊した後の世界にもうさぎは登場した。昔話のように切り株や蟻塚の上のような眺めのよい場所ではなく、手にしていたのも葉っぱではなく、粗悪なノートに手書きされた「この世を慰めるもの」²、つまり小説本だった。ポル・ポトを中心とした極端な共産主義を信奉する者たちが残した負の遺産のひとつは文化的文物の破壊である。『書物の破壊の世界史』（バエス、2019）では、ポル・ポト政権（1975-1979）は「恐怖の政権」の事例として、「ソビエト連邦における検閲と焚書」「スペインのフランコ主義」「中国の文化大革命」と並んで取り上げられている。

知識人に恨みを抱く彼らは、作家や芸術家たちを無用の人間とみなして殺し、知識の象徴でもある書物をためらうことなく一掃した。各地の図書館の蔵書は没収され、大量の印刷本と貴重な古文書が何百冊も薪の代わりに燃やされた (p.535)





国立図書館の入口の標語「力は一時のもの 知性は永遠なるもの」：筆者撮影

破壊、殲滅、消去の対象は、もちろん書物を巡る人びとにも及んだ。ポル・ポトを中心とした極端な共産主義を信奉する者たちは中国の文革を手本として、国民を近代技術に頼らない農業に強制的に従事させ、より短期間に国家の発展を「大躍進」させ自分たちの理想郷の実現を目指した。人びとはサンスクリット語やパーリ語由来の氏名、言葉遣いや、合掌して挨拶する伝統的な動作のそぶりを見せただけでも、再教育と称して連行された。眼鏡をかけている、外国語がわかる、筆記用具や印刷物が持ち物に含まれている、など文字が読めることを示すあらゆる些細なことが生命を危険にさらすことになった。その結果、750万人ほどの国民の少なくとも170万人が、1975年から4年も経たないうちに病気、疲労、飢餓、虐殺のために命を落とした。

党のお墨付き本

ポル・ポト政権崩壊後に樹立されたのは、隣国ベトナムに強力に支援された新たな社会主義政権だった。ベトナムの「支配下」にあるとみなされたカンボジアは、東西冷戦下にあつて東側諸国の一員となった。国連での議席は与えられず、西側諸国の公的な支援も受けられなかった。それでも生き残った人びとの暮らしは続いていく。国は一刻も早く社会基盤を整えていく必要があつた。ポル・ポト政権により地方へ強制移住させられていた都市住民はプノンペンに戻ってきた。かつての公務員や教員は公共機関で働くことを推奨された。ただしマルクス・レーニン主義政治教育を少なくとも数ヶ月から半年受けることが必須であつた。公共機関の各セクションにはベトナム人専門家が配置され、適宜、「指導」が行われた。

不足していたのは人材ではなかつた。印刷所は数か所しかなく、遠くモスクワで印刷されるものも少なくなかつた³。印刷されるものは政府や党に関するものが中心で、小説は党の検閲を通つたものだけであつた。作家はもちろん党に忠誠を表明し、マルクス・レーニン主義政治教育プログラムを受けた。党公認の作家たちが生み出す作品は、党の宣伝活動のための道具となつた⁴。出版元である「文化出版社」による、「作家同志」の文学作品

が革命人民党の発展にいかに関与しているかを説明した前書きや、判で押したような著者による献辞のページが必ずあった。

カンボジア革命人民党に / カンボジアとベトナム、そしてきょうだいである世界中の社会主義諸国との共闘に / カンボジア革命のため、そして国民のために犠牲となり、負傷し障害を負った戦士たちに / 祖国防衛と祖国建設の闘争に従事する全戦闘員に / 公的機関から軍に志願した諸君に捧げる⁵

このような党の「お墨付き本」は出版されても公的機関に配布され、鍵のかかる書類棚に入るのがせいぜいで、一般の読者が気軽に手にとることはできなかった。何にせよ、ポル・ポト時代を生き延びた「本の虫たち」の食指が動くような内容であるはずもなかった。

貸本文化と手書き小説

ポル・ポト政権以前、つまり1960年代、70年代前半、都市には多くの本の虫たちがいた。読み物はラジオや映画と並んで娯楽に欠かせないものだった。街角の売店や書店には次々と創刊された新聞や雑誌、小説が積まれた。街のあちこちに開店した貸本屋には、それらの新刊小説や毎週発売されるカンボジア語訳の中国剣劇シリーズの最新号、フランス語バンデシネの新作が所狭しと並んだ。わずかなお小遣いを手にした小さな子どもから、勉強の合間のささやかな楽しみを求める高校生まで、貸本屋の前に備え付けられたベンチに座り込んで、本を読み耽っているのが日常のありふれた風景だった。

ポル・ポト政権崩壊後の何もかもが荒廃した社会で、過去の読書熱を単なる郷愁に終わらせず、ビジネスチャンスと考える人びとが現れた。印刷手段はなくても、再開されたばかりの学校に通う学生たちをアルバイトとしてかき集め、分担して書写させれば一度に大量生産できる。肝心なのは本の虫たちがレンタル料を払ってでも次々と借りたくなるようなコンテンツの調達と、それを持続的に、しかも短期間に大量に生産できる小説家の確保である。さらにそれが当局に見つかれば、手書き本は押収、小説の内容によっては作家も厳しい処分を受けるのは免れない、ということも織り込み済みで。

このビジネスチャンスに、絶妙なタイミングで現れたのがうさぎだった。うさぎの作品『恋を探して』の前書きは例えば次のようなものである。

空の大きさを測れたら、きっとひとの心の動きも捉えることができる
そよ風に姿かたちはなくても、どこから吹いてくるのかわかる
でも人には姿かたちがあっても、心の満ち干を汲むのは至難の業



手書き本『恋を探して』書写された十数冊のノートは後にマウ・ソムナン氏が保管のために合冊している：
1995年、筆者撮影

うさぎの作品は、党がスローガンとして掲げる「民族と階級を解放する」「フランス植民地主義者による国内外の被害を救済する」「民族統一と国際共闘」をテーマにしていないし、敵と闘うために志願する革命青年や看護師や教員となって銃後を守る革命女子も登場しない。それどころか、物語はプノンペンにある豪華ホテルの一室で若い男女のベッドシーンで始まったりする。ミステリーと恋愛を混ぜ合わせたエンターテインメント小説で、時代設定は特定できないようにしてある。本の虫たちは、抑えつけていた読書欲を満たすかのように、うさぎの紡ぎ出す恋の物語を貪るように読んだ。ざらざらとひっかかりのある灰色の紙を綴じた市販のノートに、インクが詰まりがちなボールペンで手書きされたものは、本とは言い難い形状のものだった。十数ページごとに異なる筆跡で、綴りの間違いも多く、しかも写書の時間節約のために多数の省略記号が使われていた。おまけに「うさぎとは誰なのか」という疑問は解消されないままだった。

うさぎとは誰なのか

この答えを知っていたのは、うさぎの母親と、小さな市場の中にあつた貸本屋と、そこにうさぎの作品を持ち込んだ雑貨屋の女性だけだった……というようなことが詳らかになったのは、小説家うさぎ誕生から実に40年以上の歳月を経て出版されたマウ・ソムナン著『うさぎとは誰なのか』（2019年）による。現在のカンボジア出版業界での常識では、文芸書や実用書でも一刷の1000部発行のみである⁶のに対し、同書に限っては、第一刷は5000部、第二刷（2023年）は1500部とベストセラーとなった。

マウ・ソムナンは、1959年に教員の父と病弱な母のもと、5人きょうだいの長女として、アンコール遺跡を有するシエムリアップ州の州都に生まれた。父の異動に伴い、地方都市を転々とした。そのせいか、幼い頃から内気で物語が好きで子だった。父に読んでもらっ

た絵本の内容を空で覚えてしまい、近所のお年寄りたちにあたかも本を読むかのように話し聞かせていた。学校に行くようになってからもクラスメートとはあまり打ち解けず、家の父の書棚の本を読み漁るような文学少女だった。最愛の父親は、マウ・ソムナーンに将来は経済的自立のためにも教員になることを希望したが、彼女は小説家になりたいと中学生のときに父にうちあける。高校生になると、人気小説家の作品や中国の活劇小説を読み込んで小説の書き方を研究した。高校卒業間際には経済的に困難な状況にある生徒たちを支援するためのチャリティ演劇公演を企画、脚本を担当し、稽古も順調にすすみ、鑑賞チケットは完売した。だが本番の日は訪れなかった。ポール・ポトラがカンボジアを掌握したからだった。

教員だった父は「革命の敵」であり、それに連なる家族も「学習」「鍛錬」⁷が必要不可欠とみなされた。やがて父は連行され消息不明になった。だがマウ・ソムナーンは奇跡的に母と妹弟4人とともに殺害を免れた。それからは彼女が必然的に家族の大黒柱となるしかなかった。

小説家うさぎの誕生

小説家うさぎが誕生するにいたった顛末は『うさぎとは誰なのか』に映画のワンシーンのように描かれている。ポール・ポト政権崩壊後、マウ・ソムナーンは将来の見えない毎日に焦燥感を抱いていた。最も敬愛していた父、そして結婚を誓った恋人はポール・ポト時代に亡くなった。幼い頃からの夢だった小説家からは程遠い生活だった。おにぎりとお魚の干物の切れ端だけの昼食にも事欠いた。そこに彗星のように現れたのが、ガソリンを入れるために偶然立ち寄った元空軍パイロットだった。相思相愛の仲になったものの、名家を標榜する男性の家族から結婚を反対され、さらに男性は、社会主義体制に嫌気がさし、アメリカに亡命してしまう。自分は寄る辺のない小柄な22歳の小柄な女性。ポール・ポト政権崩壊後、プノンペン片隅にひとり立って、タバコのぼら売りとお瓶に小分けしたガソリンを売って、母と4人の妹弟をなんとか養っていかねばならなかった。

それは1981年のある土砂降りの日のことだった。小さな傘では雨風を防げない。雨にそば濡れて体が震えた。彼に会いたくてたまらなくなった……雨は降続ける。私が相変わらずガソリンを売っている場所に。でも彼の姿はない……私は叩きつける雨と競うかのように号泣した。やがて雨が止むと、私は走って雑貨屋に行き、ノートとペンを買ってきた。そして書き始めた。彼と話したかった幾多の言葉を忘れてしまいたくなかった。このノートに甘美で辛い私の恋の物語を書き留めておきたかった。タバコのカートン箱の上では書くのは至難の業だった…… (p.83)

雑貨屋の女性は、近くで小商いをしている若い女性がノートとペンを突然、買いに来て、小説を書いていると知ると、読ませてほしいと懇願した。手書き小説を心ゆくまで楽しんだ雑貨屋の女性は、マウ・ソムナーンの許可なくそれを貸本屋に売ってしまう⁸。それを知っ

たマウ・ソムナーンは自ら貸本屋に出向き、交渉する。作品を1本売れば、1週間、家族をどうにか養うことができる原稿料が手に入るようになった。貸本屋はマウ・ソムナーンが書いたものはすべて買い取ると確約までした。彼女は道端での小商いをすっぱりやめ、自宅にしていた小さな掘っ建て小屋の裏の木の下に机を置き、仕事場にした。ポル・ポト時代に多くの作家たちが亡くなってしまっていたことが追い風になり、それまでに蓄積された負の感情が執筆の原動力となったとマウ・ソムナーンは同書で語っている。

「私は最も若くて、最も知識もない小説家となったのだった」(p.86) 小さな小説家うさぎが誕生した瞬間だった⁹。

甦った文学の土壌

結果的に、マウ・ソムナーンは1981年から6年間で120作品の手書き小説を世に送り出した。貸本屋は市内には10ヶ所以上、また地方都市にも普及したという¹⁰。本名マウ・ソムナーンとして創作活動を始めたのは1987年、世界情勢的にも冷戦終結に向かい始め、カンボジア国内でもさまざまな規制が緩やかになり始めた頃だった。ビデオ産業が活況を呈し、ドラマ脚本の依頼が来るようになったのである。人びとの娯楽としての関心はレンタル・ビデオに移っていき、手書き本の人気は下火となった。小説家マウ・ソムナーンとして一般の人びとに知られるようになったのは、カンボジアの内戦が終結し、王国として再出発した後、1995年に国王名を冠した第一回シハヌーク文学賞で長編小説『砂に打ち寄せる波』が一位を受賞してからだった。さらにペン・ネームと併記して小説が出版されるようになったのはつい最近のことである。



マウ・ソムナーン氏：1995年、筆者撮影

1980年代の手書き小説のことはもちろんのこと、小説家うさぎについて言及している本は極めて少ない¹⁾。現行の中等教育用の国語教科書で扱われている現代文学や作家は、1970年代のポル・ポト政権時代以前までのものだけである。またカンボジア語による学術書であっても、マウ・ソムナーンの名前と作品名は1990年代以降の時代区分で簡単な紹介があるのみだ²⁾。そのような中、小説家うさぎが『うさぎとは誰なのか』の出版、販売開始のお知らせがマウ・ソムナーン自身のSNSアカウントのページに投稿されると、多くの読者がコメントを投稿した。「いいね」には1.1万人、コメントは904件、そのうち長文によるコメントは223件に上るほどの人気であった。その中でも比較的年齢層が上の読者からは「うさぎ先生の手書き小説のときから愛読しています」「1983年、84年ごろの手書き本のときからずっとファンです」「手書き本の頃から、うさぎ先生の作品は読むと必ず泣いてしまいました」「若いころから先生の本が好きでした。当時は小説家うさぎという名前しか知らず、先生のお顔も見たことがありませんでした」「昔は寝食忘れてうさぎ先生の小説を読み耽っていました。停電になったら、ランプに火を灯して深夜まで読みました。あの頃は、手書き本を貸本屋で借りてきて、続巻が何巻あっても終わりまで読みました」というコメントが寄せられている。

小説家うさぎと手書き小説は、カンボジア文学史のページにも文学の正典のリストにも現れない。だがポル・ポト時代によって壊滅的な打撃を受けた文学を巡る世界を甦らせ、次世代の本の虫たちを育てていったのは、「党の公認作家」や「党のお墨付き本」ではなく、小説家うさぎと彼女の手書き小説だったのである。

後注

- 1 本研究はJSPS 科研費24K03812の助成を受けたものである。
- 2 カンボジア語で「小説」を意味する。
- 3 1980年代の出版についてはChhuong (1997)に詳しい。
- 4 1980年代の党公認の作家、作品については岡田 (1998)を参照。
- 5 ソム・ソボル著『春』(1986年、文化出版社)より。
- 6 メンリーチ・クオイ大学出版会編集者であるイエン・チアンリー氏との2024年9月21日のインタビューによる。
- 7 ポル・ポト政権時代に使用された言葉で、死を示唆した。
- 8 この作品は『少女クリヤナの涙』(1981年)で、最初の商品となった。後にラジオドラマとして放送された。(Huon Silaun, "Reclusive author Tonsay in 'ill health'" *Phnom Penh Post* Publication date 14 November 2022) <https://www.phnompenhpost.com/national/reclusive-author-tonsay-ill-health> (最終閲覧日2024年10月13日) また2006年には出版、販売されている。
- 9 うさぎ以外にも数人の手書き小説作家が存在した。小説家うさぎと同様の人気を博していたのは、ペン・ネーム「書記」で書いていたトゥム・マニーである。トゥム・マニーについては別稿に譲る。
- 10 2024年8月に筆者が行った、パル・ヴァンナリーレアク (1954-)、トゥム・マニー (1946-) などの手書き小説作家とのインタビューによる。
- 11 概説書に岡田 (1996:167)、May (2004:172)がある。手書き小説に関する学術的研究はこれまでのところBernon (2001)のみである。
- 12 例えば『20世紀のカンボジア文学』(キン・ホックディ、2007)、『カンボジア文学の流れ』(イアン・ピサイ、2012)などは一般の書店で入手できる。

参考文献

* 日本語文献

- 岡田知子「現代の文学」『もっと知りたいカンボジア』明石書店、163-169：1996年。
———「1980年代の社会主義政権下におけるカンボジア現代文学——民心獲得を狙った政治宣伝の道具——」
『言語文化研究所紀要』30(30) 慶應義塾大学言語文化研究所 71-92：1998年。
バエス, フェルナンド『書物の破壊の世界史』紀伊國屋書店、2019年。

* 外国語文献

- de BERNON, Olivier, “La littérature des années de misère : les petits romans manuscrits du Cambodge, de 1979 à 1993”,
Séminaire Paul Boudet, Bibliothèque Nationale du Cambodge, Phnom Penh, 27-29 novembre 2001.
- May, Sharon, “Words from the Fire: Three Cambodian Women Writers” *In the Shadow of Angkor: Contemporary Writing from Cambodia*, University of Hawaii Press, 2004:169-188.
- Tauch, Chhuong, “Les Publications au Cambodge après 1980” In: Pierre L. Lamant (éd.), *Bilan et perspectives des études khmères (Langue et Culture), Actes du Colloque de Phnom Penh, 29-30 novembre - 1^{er} décembre 1995*, Paris, L'Harmattan, 1997:43-62.